

「菅原。やり直し」

「うう、はいっ……」

眼鏡越しの、無慈悲で怜悯な視線に心臓が震える。

この言葉を聞くのは何度目だろうか。だいぶプレゼン資料作りにも慣れてきたはずなのに——そう思った矢先に、修正箇所が書かれたメモを渡された。

「こことこの数字が逆だ、売り上げが下がっているように見せてどうする。それと誤字がある、変換ミス。それ以外は——そのままでもいい。前よりは出来てる」

「は、はいっ、申し訳ありません、チェックありがとうございます……!」

慌ててメモを受け取る。以前は構成からやり直しだったけれど、今回は全部やり直しというわけではなさそうだ。

ケアレスミスは気を付けなければと思いつつ、少しほっとして頭を下げると、返された資料と共に「豆菓子」の袋がついてきた。

「……？ あ、高崎部長、これって」

「やる。先方から貰ったが、俺は食わないんでな」

「あ、ありがとうございます……っ」

これが飴と鞭というやつだろうか。

飴と言うにはしょっぱいものの、やっぱりよく見ているな、と感心する。

最近気がついた。黒縁眼鏡のよく似合うイケメンでものごく仕事ができるが、成果主義で人と馴れ合わない——そんな高崎部長は、実は部下のことをよく見ているのだ。

なんせ、このシリーズの豆菓子が度々わたしの机の上に乗っかっている、ということまでも、知っていたのだから。



苦手だった

眼鏡のイケメン エリート上司に

痴漢から助けられた勢いで
セフレになるかと思ったら

なぜか口説かれ

ド執着溺愛 ルート入り

しちゃった話

ろこもこうさぎ

絢辻透

やってしまった。

翌日、わたしは満員電車の中、できるだけ人に揉まれる可能性の少ない隅っこで丸まっていた。

いつもラッシュを避けた電車に乗っていたけれど、昨日あれから調子が出て少し残業した結果、寝坊して一本遅い電車に乗ることになってしまったのだ。

もう一本ずらそうにも、人ごみから抜け出すことが難しく、結局押されるまま満員電車に乗り込む羽目になってしまった。

（はあ……まあ、いいか。昨日で無事にプレゼン資料も作り終わつたし、部長からの直しも少なかったし、お菓子ももらえたし……嬉しかったなあ）

いつもやり直しだった資料も修正が少なく、格好いいけれど少し怖いと思っていた部長にもお菓子を貰えたことでかなり仕事へのやる気が上がっていた。

我ながら単純だな、と思いつつつらつらと仕事のことを考えながら、隅の手すりに捕まっ
ていて十数分も経った頃。

（昨日入力しはじめたデータの続きと、細かい調整と……あとは来月のスケジュールも入れて……、……ん……？）

そろそろ会社の最寄駅だ、というところで腰あたりに何か触れた気がして首を傾げる。揺れたからだろうか。当たらないようもぞもぞと身体を縮めていると、また何かが緩く触れた。

（ぎゃつ、なに……！）

横にいる男の人の、手の甲が腰にゆるゆると触れてきている。

ぞつとした。最悪だ、絶対痴漢だ——そう思って必死に鞆を盾にしようとする、後ろの人が動きを遮るようにわたしの肩を掴んできた。

「ひいっ……」

「静かにね。酷いことしないから」

「俺らと気持ちよくなろうよ、お姉さん」

——二人いる。しかも、囲まれている。

最初から狙われていたのだ、と思つて身体が竦んだ。この路線は多いと聞いていたけれど、本当にいるなんて。

足が竦み、震えて声が出ない。そんなわたしを見て、男たちは笑いながら覆い被さってきた。

後ろから羽交い締めするように腕を回されて胸へと手を這わされる。

(やだ、どうしよ、お——大きな声、出さなきゃ……っ、！？　な、なんか、擦り付けられて……っ)

興奮した息がかかる。露出した下半身をスカートに擦り付けられていた。

二人とも体格の良い身体を寄せているから、外からはどんなことをしているか見えないだろう。少し身を振ったけれど、びくともしない。

声が出せなければ気付かれることも難しそうだ。

どうしよう、どうしよう——そう思っていた時、突然シャッター音が響き、ひとりの男

の身体が離れていった。

「お前ら、次の駅で降りろ。抵抗しても無駄だぞ、撮ったからな」

「あ……た、高崎部長……っ！！」

後ろから低い声が響く。

聞き覚えのある声に慌てて顔を上げると鬼の形相をして男の後ろ襟を掴む高崎部長がいた。

高崎部長の声が響いたのだろう、車内がざわめいて、周りの人達が協力してもう一人を引き剥がし、抑えてくれた。

一気に身体の力が抜け、安堵感に包まれる。震えそうになる身体をぐっと堪えて、高崎部長と周りの人にお礼を言った。

——次の駅で、男たちは無事に警察に身柄を拘束された。

証拠の写真を持っていた高崎部長と共に事情聴取を終え、全てが片付いた頃にはお昼近くになってしまっていた。

「はあ……こんな時間までありがとうございます、高崎部長……っ」

「よかったのか、示談金なんかで」

「はい、部長のおかげで、そんなに大した被害でもなかったですし」

納得いかないような口振りの部長と共に警察署から出る。

痴漢に遭ったことは本当に怖かったけれど、今は高崎部長がいてくれるから心強い。そう思って顔を向けると、思った以上に間近に高崎部長の顔があつて驚く。

「二人に囲まれて、乱暴されそうになっていたんだぞ。大した被害じゃないわけ、ないだろう」

「そ、そう……ですかね、でも高崎部長に助けていただいたので……っ」

屈んで顔を覗かれていた。

こんなに間近で顔を見たことがなかったので、思わず息を呑む。

驚くほどに端正な顔立ちだ。肌はきめ細かいし、まつ毛があまりにも長くて、かけてい

る黒縁眼鏡のレンズに引かかるんじゃないかとすら思う。

目元には少し隈があるけれど、それすら物憂げで美しく感じさせるほどだ。

「顔色が悪いな……とにかく今日は休んでおけ。俺も半休を取ったから駅まで送る」

「はい、すみません……あ、でもその前にちよつと服を、買いたくて」

「……服？」

ぐつと喉が締まる。

やっぱり部長の位置からでは、具体的に何をされていたかまでは分からなかったらしい。恥ずかしくて視線を合わせられないまま答えた。

「ちよ、ちよつと汚れてしまったので……」

「——どこがだ」

硬い声音で問われてまた視線がうろつく。

多分、お尻のほうだ。けれどはっきりお尻です、と言うのは恥ずかしくて口籠もってし

まった。

「えっと、スカート……です」

「どうしてそれをさっき言わなかった」

「ご……ごめんなさい、でも、本当にちよつと今、買えれば」

「早く買って着替えられる場所に行くぞ。そこのデパートでいいか」

「えっ、あ、はい、すみません……っ！」

怒ったように早足でデパートへの道を歩き出す部長に慌てて着いて行こうと駆け出すと、すぐに部長が足を止めて振り返り向いた。

先ほどよりも幾分小さな声で、菅原が謝ることじゃない、と言って——そこからは、わたしの歩幅に合わせて、歩いてくれた。



「菅原……本当に俺がここに来てよかったのか」

「あ——はい、もちろん。すみません、買っていた上に我儘を言ってしまった……」
「それは構わないが……」

無理を言ってしまった。

近くのデパートでなぜか部長に服を買ってもらってしまい「早く着替えたほうがいい」と言われて、それならシャワーも浴びたくて……と零した、までは良かったのだが。

じゃあ俺は仕事に戻るから、と言われて思わず「えっ……？」と声が出て——そのまま、近くのビジネスホテルまで一緒に来てもらってしまった。

「一人でいるのが……ちょっと、心細くて」

だからと言ってこんな所まで男の人についてきてもらうなんておかしいのは分かっている。

でもどうしても、今は一人でいたくないような気がした。

やっぱりわたし、ちょっとショックだったのかな、なんて思ってたホテルのドアをぱたりと閉めた瞬間だった。

「それなら近くに喫茶店もある、シャワーを浴びたらすぐに出てそこに……、……菅原」

「は、はい……っ」

「菅原、……どうした、大丈夫か」

自分でも驚いた。

想像以上にショックで心が揺れていたようで。

なにかがぷつりと切れたように、震えが止まらなくなってしまった。

「……すまない。お前を置いていくつもりで言ったんじゃない。もう大丈夫だから」

「はい、ちが、違うんです、すみません、」

「謝らなくていい。大丈夫だ。お前は何も悪くない」

目の前に膝をついた部長が、言い聞かせるように声をかけてくれる。

何度も頷きながらも、声が出なかった。そんなわたしをしばらく見つめた部長は、少し迷った様子ながらスーツを脱いで、わたしの肩に被せてくれた。

男性用のスーツの、少しの重たさと暖かさが、不思議と今は心地いい。

「ごめんなさい、本当に、さっきまでは、平気だったんですけど」

「平気ではなかったんだ。耐えていたんだろう、ずっと顔色が悪かった。……寒いか、今ブランケットも……、……」

「あ……っ」

考えるよりも先に、ブランケットを探して遠ざかりかける部長の手をぎゅ、と掴んでしまった。

驚くほどに暖かい。そこでようやく、自分の身体が冷えてきっていたことに気付いた。

「菅原」

「あ——ごめ、ごめんなさい、そんなつもりじゃ……っ」

「平気だから、謝らなくていい。……大丈夫だ、離れないから」

優しい口調で言われてまた、こくこくと頷く。少し遠慮がちに手を握り返されてほっとしたところで、軽く手を引かれてソファへと連れられた。

隣に座ってくれた部長が、様子を伺うように屈んでわたしを覗き込む。

「あ、ありがとうございます……少しだけ、こうしてもらえると」

「少しでなくともいい。落ち着くまで、このままでいるから」

声が近い。包むように手を握られ、言い聞かせるようなトーンで返されて、少しずつ落ち着きを取り戻して行く。

こんなことまでしてもらって申し訳ないけれど、身体はなかなか暖まりそうになった。レンズの奥の涼しげな瞳が、どこか心配げにわたしを見つめてくれたのをいいことに、縫うように顔を上げた。

「部長……わたし、寒くて……その、もう少しだけ、くつついても、いいですか……？」

今はもう、部長に触れているところだけしか、暖かくない。
震えながら吐き出した言葉に、構わない、という返事と共に優しく抱きしめられて――
それでまた、何かの糸が切れたような気がした。



“触られたところ、部長に触ってもらうと、安心します ”

抱き合ったまま、小さく呟いた言葉が引き金だったような気がする。

「……こんな所でそういうことを、言うものじゃないぞ」

細く長い吐息のあと、そんな囁きと共にひよいとお姫様抱っこされてベッドに連れられてしまった。

慌てている間に柔らかく下ろされる。心細くなって見上げると、ネクタイを緩ませた部長が、こういうことになるからな——と囁いてきて、ぶわっと頬が熱くなった。

（もっと触って欲しかったから、言ったんだけど……そっか、これ、これって……）

「ここ、触られていただろう」

「へ……っあ、は、はい……ひゃ、っ♡」

覆い被さられて、ちゅ……っ♡ と首筋を吸われる。

擦ったさに身体が震えたけれど、不思議と怖くも嫌でもなかった。未だ冷えている手をそっと取られて、そこにも唇が寄せられた。

「——他には、どこを触られたんだ？」

「えっ、それはその、は……恥ずかしい、ので……っ」

「言ってくれないと分からない。俺からは見えなかったからな。どこを、触られていたんだ？」

指の甲へと口付ける仕草が、こんな時なのに恭しい。

視線がうろつく。どうしよう、と思ったのに、口から出た言葉は実に正直なものだった。

「あ、その……む——胸、とか……っんん、……！」

「ここか」

ちゅ♡　ちゅうう……っ♡

囁いた瞬間、既に少し乱れていたシャツのボタンが外されて、鎖骨の下へと口付けられる。

膨らみに柔く押し付けられる唇は、さっき触ってきたような男の人とは違って、ずっと触っていてほしくなるほどに甘やかで丁寧だった。

「は、ん……ふう……♡」

「……これだけでも、少し身体の強張りが取れていつてるな。敏感なんだな、菅原は」

「ふえ……っ？　じ、自分では……わからな、っんう……っ♡」

「ん、ぢゅ……っ、……敏感だろう。少しキスしたくらいで、あちこち震わせて。こんなに敏感なのに、あんな奴らに乱暴に触られてさぞかし怖かっただろうな……」

どこか不機嫌そうな口調が不思議できゅっと口を結びながら部長を見ると、すぐに気付かれて目線が合う。

ずっと眉根を寄せていたのに、わたしの顔を見た途端にふっと表情が緩んで頬を撫でられた。

「すまない、怖かったな。菅原に怒ったわけじゃない。奴らに触られたのが癪でな……本当は俺も、こうしてお前に触れたいと思っていたから」

「え……っ？ わ、わたしに……？」

「ああ、お前に。さっき触られていたところ、全部俺が触れて……上書きしたい」

熱っぽく囁く言葉と共に抱き寄せられて身体が浮いた。気付けばシャツも肩あたりまではだけてしまっていて、恥ずかしいのに抵抗できない。

言葉の意味を考える暇もなく、背中に手を回され——ぱちんっ、という音と共に、ブラ

ジャーのホックが外されてしまった。

「あ……っ！？ あ、は、恥ずかし……つぶちよ……っうう♡」

「ここ、触られたんだろう？ もっとちゃんと、触りたい……ああ、凄いな。菅原の心臓の音、伝わってくる」

もにゅ♡ むにむに♡ すりすりすり……♡

柔らかく揉まれ、脇近くの膨らみを辿られて身体がびくん♡ と跳ねた。くすぐったいし恥ずかしいのに、じわじわと身体の奥から疼きが這いあがってくる。

どうすることもできないまま、ブラジャーまでもすると取られる。

見下ろす部長の前、わたしは——肩下まで素肌を晒し、おっぱいも丸見えの状態で、ただ震えていた。

「……菅原」

「ううっ、恥ずかし、部長……みないで、くださ……っ」

「可愛い」

——え？

可愛い……って言われた？ と頭の中で繰り返した瞬間だった。覆い被さった部長が、寒さでほんの少し硬くなっていた乳首に、ちゅ……っ♡ と唇を寄せた。

「あうっ……！？ つあつ、や、たかさき、ぶちよ……っん、あっ♡」

「ん……身体、どんどん、熱くなってきたな……ここ、好きなのか？」

ちゅ♡ れろれろ♡ ちゅうう……っ♡

熱い唇で先っぽを何度も吸われてぞくぞくと腰が浮く。昂った声が出てしまうのが恥ずかしい。何度も吸われるうちに、吸われた片方だけがびん……っ♡ と勃起してしまった。

「ううっ、んん♡ 部長、吸うの、恥ずかし、からあ……っ♡」

「へえ……吸うたびに身体を浮かせて、気持ちよさそうにしているの？ 菅原……片っぱだけ尖ってきてるぞ、いやらしいな……」

「……やあ……言わないでくださ、高崎、ぶちよ……っあ、あっ♡ 両方、しちや、っうぐ

」……♡」

きゅむ♡ かりかり♡

カリカリカリ♡

細い指先がもう片方の先っぽを摘み、甘く引つ搔く。這い寄る疼きがとうとう誤魔化せず、ひく♡ ひく♡ と腰が浮いていく。

（どうしよ、あんなこと、あつた後なのに♡ 部長に、こんなえっちなことされて……わたし、興奮しちゃってる……♡ あ、だめ、指でゆるゆる引つ搔きながら、もう片っぽも舌でこすこすするのため♡ うう、これ……なんか、指も、舌もずっと、わたしのこと氣持ちよくしたいって言われてる、みたいなの……♡）

「ふ……どつちも尖ってきたな、……可愛い。駄目だな、少しだけにするつもりだったのに……こんな反応をされると、もつと触りたくなる」

「そん、な……っあ！？♡ やつ、あ、ひ、ひろげないで……っんうう……♡」

くばあ……♡ と乳輪を伸ばされて、ぴん♡ と勃った乳首がはつきりとわかるようにされてしまう。恥ずかしすぎて身を振ろうとしたけれど、足の間に部長の身体が入り込んでいるのでろくに身動きが取れなかった。

「指でよしよしってされるの、好きなんだな。固くなったところ、こうやって爪先で引っ搔くと……ああ、すごいな。そんなにびくびく身体を揺らして、俺の腰に擦り寄ってきてるの、わざとなのか……？」

「ひ……ちがつ、つあ♡ だめ、かりかり、だめっ♡ こし、腰揺れちゃうからあ……っひい、んん……♡♡」

カリカリ♡ こすこす♡

ぴんぴんぴん♡

すっかり硬くなったそこを弾かれる度に腰が揺れて甘い声が止まらない。さっき男の人たちに触られていたときは恐怖で声も出なかったのに、今はどうしてこんなに甘ったるい声が出てしまうのだろう。

慌てて両手で口を塞ぐと、ふ、と笑みを含んだ吐息が聞こえてきた。

「声抑えても、そんなに腰を押し付けていたら意味がないんじゃないか？ ほら、指と口で一緒に刺激してやると……ん……ちゅっ……」

「んうづっ！？♡ やあ、だめ、声でちゃッ、くくう、んんっ♡ ふくく……っ♡ ふうづ……♡」

「ふ……やらしい息出して、身体びくつかせて。俺の舌と指で、気持ちよくなってるのバレバレ、だな……？」

ちゅ♡ ちゅくくっ♡

カリカリカリ……♡

甘やかされるみたいに何度も何度も吸われて擦られて、気持ち良すぎてろくに我慢できない。

せめて恥ずかしい声が出ないようにしているのに、塞いだ指の隙間から興奮しているのが丸分かりの荒い吐息が溢れて止まらない。

（だめ♡ だめ♡ 胸触られてるだけなのに、なんでこんな気持ちいいの♡ 甘い声出

して感じてゐるの恥ずかしい、のに♡ きもちよくて、じわじわ愛液染み出してきちゃって
る……っ♡ こんな絶対だめなのに、部長に向かって腰へこへこするの、止められない
よお……♡)

「……なあ、菅原。ずーっと俺の腰にすり寄せてる、ここ……熱くなってきたるな……？」
「へ……っ！？ あっ、あ、ちが、……あ……っ？♡」

すり♡ すり……♡

さっきまで甘やかに乳首を愛撫していた指先が、焦れたいほどゆっくりとお腹を辿つて、
もも裏までをなぞっていく。少しシワになっっているスカートをたくし上げて、下着ま
でも見られてしまった。

「もしかして、ここも触られたのか」

「へ、？ そ、それは……あうっ♡ っっ……うう、……それは、その……っ」

伝う指先が下着をなぞって、ぬちゅ♡ と水音を立てた。自分が思うよりも濡れていて

身体中が熱くなる。さっきまではあんなに冷たかったのに。

言い淀むわたしの答えを待っている部長に、ごくりと唾を飲み込む。

（どうしよ……そこは、触られてない、けど……。触られたのは胸だけだし、下は……お、お尻に少し押し付けられたくらい、だし……。っ。それだけ——だけ……）

「教えてくれ、俺からは見えなかったから。なあ、菅原……ここも、触られたのか？」

部長はずっとわたしを見つめている。

確かめるように何度も、ぬるついた筋を辿りながら。

熱い息が漏れ出てしまう。わたしは部長と視線を合わせないよう瞼を伏せながら、震える口をゆっくりと開いた。

「さ——さわられ、ました……。っあっ！？♡ あ、や、うああっ♡ やあ、はげし、たかき、ぶちよ……。っ♡ それ、こするの、だめええっ♡」

「駄目？ 触られたんだろう？ この、愛液が染みてぬるぬるの筋も……。下着の上からもわ

かるほど勃起したクリトリスも、触られたんだよな……？」

ぬるっ♡ ぬるっ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

わたしの愛液で濡れた部長の指が下着越しにクリトリスをなぞる。それだけで足先がピ
ン♡ と伸びてしまうほど気持ちよかった。

（あ、あ、だめ、きもちいい♡ だめなのに、言えない、嘘、ついちゃったから……っ♡）

「ひい、んっ♡ あっ♡ うっ、うう……♡」

「ああ、そんなに甘い声を出して……あのとき、早く気付けて本当によかった。菅原のクリ
トリスがこんなに敏感なこと、あいづらにはバレたら大変だっただろうからな」

「ひいんっ♡ や、やっ、そんな、わたし……敏感じゃ、っああ♡ だめそこ、かりかりし
ちゃ……ふうう……っ♡」

ぬりゅ♡ ぬりゅっ♡

カリカリカリカリ♡

薄い布越しにぬるついた指でクリトリスを引っ搔かれてたまらない。こんなに敏感じゃなかったはずなのに、部長に触られるところはどこもぞくぞくして気持ちがよくなるばかりだ。

「敏感じゃない？ 菅原のクリトリスは、引っ搔かれるたびに気持ちよさそうに膨らんでいるがな……ああほら、そんなに腰を高く上げていると、まるで……俺におまんこ、差し出してるみたいだぞ……？」

「っっっ！？」 ちが、あぁっ、あぁんっ♡ まって、まつ、うぐ♡ ちがう、のにい……っ♡」

へこへこ♡ と止まらない腰に合わせて、溢れた愛液を裏筋からぬりゅゅっ♡ と擦り付けられる。

こんなの違うのに。少しだけ、触れていてほしいだけだったのに。今はもう、部長がくれる快感をもっと欲しがるだけの浅ましい動きしかできずにいる。

「下着の上からでもわかるくらい、入り口がばくばくしているな。太もも震えてる……菅原、こうやってクリトリス、撫でられてるだけでイキそうなのか……？」

「ひつ、あぁっ♡ うう、部長……わ、わたし、もう、イ……っん♡ っゝイきそ、だから、やめ、っあぁぁっ!?!♡」

カリカリ♡ すりすり♡

こりゅこりゅこりゅこりゅっ♡

恥ずかしさを堪えて頷いたのに余計に動きを激しくされてしまつてひどい声上がる。あまりの快感につらくらいだ。やめてほしくてばやけた視界で部長を見ると、いつも綺麗に整っている髪が汗で少し乱れていて、見たこともないくらい熱っぽく浮かされた表情で見つめられて、余計に身体が昂つてしまった。

(だめ♡ だめ♡ パンツの上からカリカリされてるだけでいつっちゃうの、絶対だめなの♡ そんな顔で見るのずい♡ イけ、って言われてるみたいで、あっ♡ 裏筋こすこすだめ♡ 先っぽ捏ね回すのもだめ♡ もうむり♡ いく、いく、部長の指で、いつちゃう……っ♡♡)

「ああっ、あっ♡ らめ、ぶちよ……いぐ、わたひ♡ も、だめイツ、つく、う、うぐぐ」
「……っ♡♡♡」

びくん♡ びくびくっ♡

かくかくかく……♡

必死に口を抑えたけれどほとんど無意味だった。わたしは背筋を反らし、媚びるようにおまんこを部長に向けたまま、激しくイってしまった……♡
イった拍子にまた愛液が溢れて、じわあ♡ とパンツに滲んでしまつてすごく恥ずかしい。

「……指でクリ撫でられただけで、イったのか、菅原」

「はあ、は……ふ……や、もお、見ちゃだめ……っあ！？♡ だめ、パンツとつちや、だめです……！」

余韻でベッドにくったりと身を預けていると、するする……♡ とパンツを引き抜かれ

てしまった。慌てて逃げるようにずり上がりながらスカートを降ろそうとすると、その手を取られてベッドに縫い付けられてしまう。

何か考える暇もなくこつん、と額がくつついて、高崎部長の顔が間近に迫った。

「菅原、ここは？ この、今濡れ濡れになってるこのの、奥……ぬるぬるで柔らかくて、俺の指に吸い付いてくる……ここは、触られたか……？」

「へっ？ あつ、えっ？ ま、ぶちよ……そこは、っうあ、あ~~~~……っ♡」

ぬぷぷぷ……っ♡

すっかり濡れてとろとろになってしまったおまんこに、熱い指が入り込んでくる。ずりゆずりゆと指先が内壁を擦る感覚に腰が栗立つ。

いったばかりの敏感な身体なのに、もう気持ちよくて、おかしい。

「まつでえ、ぶちよ、ああ♡ そこ、そこは、さわられて、びゃい、からあ……っ♡」

「触られてない？ 本当に？ こんなに嬉しそうに俺の指を咥えているのに、本当に触られてないのか？」

「ほんと、いい♡　そ、そんなところ……だ——だれにも、触られたこと……ない、っひいん♡」

「——誰にも？　俺以外、誰にもか？」

ずちゅ♡　ぬちゅ♡　と浅いところまで埋め込んで引き抜かれ、内壁を穿っていた指がぴたりと止まる。

確認するように繰り返す部長に、こくこくと頷く。

痴漢たちにはそもそも下を触られてもいない。それに地味なわたしには今までこういうことには縁がなかった。だから本当に誰にも、触られたことがないのだ。

「ほんと、本当に……♡　触られてない、です——部長だけ、部長が、はじめて……っ」
「ふ……————そうか」

小さな笑い声と共に、部長のまとう空気が和らいだような、そんな気がした——のに。
ずぬ〜〜〜……♡　と、もっと深くまで指を埋め込まれてしまった。

「駄目だな。お前が触られていない、と言ったらやめようと、そう思っていたのに……そんなことを言われたら、止められなくなる。菅原、もう少しだけ……俺の指で気持ちよくなってる顔、見せてくれないか」

「……!?!? そ、そんな……恥ずかし、っあんっ♡ あっやだ、くり、いっしょにするの、だ、めえっ、うああっ♡」

くりゆくりゆ♡ すりすり♡

ずちゅ、ずちゅ、ずちゅ♡

甘やかすみたいは何度も内壁を一定のリズムで擦られて、それと一緒にさつきイッたばかりのクリトリスもこねこね♡ されて、ろくな抵抗もできなくなる。

唇が触れてしまうんじゃないかと思うほど間近に迫る部長のせいで口を抑えることもままならない。

「初めてなのに、そんなに顔を蕩かせて……つくづく、俺だけでよかった。お前のこんな顔、誰にも見せたくないからな……」

「へっ? な、なんで——うあ、あ、あっ♡ 部長、それ、それダメええ……っ♡」

ぬりゆぬりゆぬりゆっ♡

ずっぽ♡ ずっぽ♡ ずっぽ♡

まるでおちんぽでピストンするように何度も内壁を穿たれながら、一緒にクリトリスも撫でられて、頭が痺れるような快感でいっぱいになる。

もう何を言われてるかよくわからない。痴漢に触られてないところまで触られてしまつて、それなのに、そこが気持ちいいことしかわからない。

「凄いな、愛液、とぶとぶ溢れてくる……なあ、菅原。次からは本当に気を付けてくれよ。あの路線なら俺が迎えに行くから——もしまた痴漢に遭って、こんなに雑魚クリで、雑魚まんこなこと……痴漢にバレたら、大変だろう……？」

「~~~~うう♡ ざ、ざこくりじゃ、ないい……っあ、ひうう♡ やあ、ううっ、くり、つままないでえ……っ♡」

ちゅこちゅこちゅこ♡

ぬぽっ♡ ぬぽっ♡ ぬぶぶぶ……っ♡

恥ずかしい言葉を言われてぶるぶると震えながら否定すると、愛液でぬるついたクリトリスをつまんで扱かれてしまった。それだけでも気持ちいいのに、ナカの指も止まらずにまた奥まで入り込んできて、あつという間に身体が高まっていく。

かくかくと腰が小刻みに揺れ、細かく快感を受け取って、イク準備を、初めてしまっている。

「指でちょっとシコシコしたくらいで腰浮かせてヨガリまくって、雑魚クリじゃない——は、少し無理があるんじゃないか？ ああ、ナカもきゅうきゅう締まって……抜かないで、って言ってるみたいだ」

「ひ、んん♡ ううつ、部長お♡ だめ……わたひ、また、いつちゃう、おまんこ、いつちゃうから、あぁ♡」

「ふ……ちゃんとイきそうなの言えて偉いな、菅原。構わない、俺の指で、おまんこかき回されていくところ、見せてくれ」

シコシコ♡ ちゅこちゅこ♡

とちゅとちゅとちゅ♡

懇願するように首を振るのにやめてもらえない。一層激しくなる指に、はっはっはっ
と犬のように呼吸が早まっていく。

さっきよりも重たくて深い快感が襲って頭がちっともついていかない。身体ばかりが嬉
しがって、もう耐えられそうもない——そう思った瞬間、耳元で「イけ」と囁かれて、目の
前が真っ白になった。

「っあダメ♡ 部長お♡ イく、また、イツぢや……あ、あ~~~~っ♡♡」

びくびくびくっ♡♡

ぷしゃっ♡ しょわわ……♡ ちよろちよろ……♡

ビクつく腰がなかなか収まらない。

余韻に浸って潮を漏らす身体を、構わず部長にかき抱かれて多幸感でいっぱいになる。

絶るように抱き着いて、抱き返されて……そのまま——わたしの臉が完全に落ちきるま
で、部長とは、何も言葉を交わすことはなかった。



side. 高崎

「……寝た、か」

すうすうと寝息が聞こえる。不思議な安堵感と共に、吐息と共に一人呟いた。
泣き腫らしたように火照った菅原の目を撫でる。

（やり過ぎ、だな）

止めることが出来なかった。

ただでさえ、可愛いと思う気持ちを普段から押し殺していたのだ。こんなことになって
抑えられるわけがなかった。

菅原はきつと俺に、少し強く抱きしめてもらうだけでよかったのだろう。

それを都合良く捉えて押し倒して——あちこち触れる度、部長、と呼びながら恥ずかしそうに震える菅原が可愛くて、たまらなくなつて。

俺の質問に、正直に答える菅原をいいことに、挙句の果てには奥までを暴いて。

（それでも、まだ足りない。まだ触れていたい。貪るようにキスをして、奥の奥まで俺のものにしたい——）

抱えた気持ちを押し込めるように、唾を飲み込む。

ただでさえ怖い思いをしたのに、上司にそんなことを思われていたと知ったら、気持ちの逃げ場もないだろう。

（……せめてここから居なくなつておかないと。仕事だからと書き置きでもしておけばいいだろう。菅原も起きたとき、一人でいた方がまだ落ち着いて——ん……？）

眠る菅原が大きく身動ぎした。起きたわけではなく、ただ寝返りを打っただけのようだっ

た——が。

寝息と共に——離れないでほしい、と言うように腰掛ける俺の腰元に丸まり、手を握ってきた。

「——……はあ、……」

どうしようもない。

こんな可愛いことをされて、動けるわけがない。

眼鏡を外して天井を仰ぐ。

ぼやける視界の中で浮かぶのは、熱っぽく上気した、菅原の顔だけだった。